



遊ぶことの論理

—D.W.Winnicottの“Playing and Reality”の読解—

広島国際大学心理臨床センター

田中 秀紀

The Logic of the Playing

—The Interpretation of “Playing and Reality” by D.W.Winnicott—

Hidenori Tanaka

Research Center for Clinical Psychology of Hiroshima International University

本論はD.W.Winnicottの遊ぶことの論理を描き出す試みである。まず、乳房には主体からの自発的な母親への関わりと、それに応える母親との出会いがある。この出会いは、主観的な対象と客観的な対象の間のずれを潜在的に抱えている。そのずれは原初の“自分でない”対象である移行対象の発生によって顕わになる。遊ぶことの素材は外的な現実性を帯び、主体にとって異物となる。それゆえ遊ぶことで、主体は内的な現実性に入りつつも外的な現実性をも維持する、二重の現実性を生きる。さらに遊ぶことの不確かさが全能感的な主観性を剥いでいき、対象の現実的な操作を可能にしていく。以上から遊ぶことを、内的な現実性と外的な現実性の間を揺らぐ、弁証法的な運動として捉えた。さらに、主体が遊ぶことに夢中になることで、主体はむしろ遊ぶことに委ね、遊ぶことが主体となる。遊ぶことが現実よりも先行し、現実を創っていく非人称的な場となるのである。

Key words : 遊ぶこと, ウィニコット, 二重の現実性, 弁証法, 主体
playing, D.W.Winnicott, double reality, dialectic, subject

1. はじめに

子どもの遊戯療法では、遊ぶことがその治療の中心となる。遊びによってクライアントは自分の問題や症状などを解決していく。そして時には、一見単調な繰り返しと見做される遊びで治癒する場合もある。それはある意味では不思議なことである。遊戯療法を専門としないものは言うに及ばず、あるいは当のセラピストですら、なぜよくなったのかの説明を施すことができない。例えばM.Kleinが、この遊びは子どもが母親の身体の中の排泄物を盗むことを意味し、あるいは迫害する超自我を意味する、などと解釈を加えたとしても—その解釈自体はかなり妥当であると筆者には感じ

られるのだが—、その解釈の意味を捉えられない場合は、用語を当て嵌めただけと感じるのみであろう。あるいは少なくともこのような解釈で、子どもがどのような幻想を抱いているのか、どのようなこころの作業を行っているのかは理解できるかもしれない。それでもなぜ遊ぶことが治療になるのかについては、どうしても疑問が残ってしまうのである。

D.W.Winnicottも同じ疑問を抱いていた。WinnicottはM.Kleinが遊びの内容—性象徴の意味—に目を向けていると考えた。そして遊ぶこと「それ自体を主題として研究される必要がある (53)」と述べる。子どもは“何の遊びをしているのか”と遊びを内容として捉えようと、我々は遊びを実体化してその中で動いている

ことを捉えそこなう。一方 Winnicott は「私は明確に、遊びという名詞と、遊ぶこと playing という動名詞に意味のある区別をしている (54)」と述べ、“遊ぶことでは何が起きているのか”，言い換えれば“遊んでいる主体に何が生じているのか”を問うた。Winnicott が playing という動名詞を用いたのは、遊ぶことは、遊ぶことにおいて主体に生じる一そしてもっと言えば遊ぶこと自体に生じる一、ある特殊な運動であると捉えていたからである。その名の通り、いかにして主体は遊ぶことで外の現実を認識していくのかを『遊ぶことと現実』では考えた。この著書は比較的平易な言葉で記述されているが、曖昧で多義的であるなどと言われる。しかし我々は、その点はある程度認めながらも、ある一定の論理が繰り返し提示されているのを感じずにはいられない。それはもちろん、なぜ遊ぶことが治療になるのか、という遊ぶことの論理である。本論はこの playing という言葉を用いて Winnicott が捉えていた、遊ぶことそれ自体、遊ぶことの動きの論理を描き出す試みである。

2. すれ違う出会いと可能性のある空間の発生

Winnicott は主体と他者との相互的な関係の場が“このころ”を創造するとした。主体と他者とのある特定の出会いが、主体にとって決定的な影響を及ぼす。Winnicott は主体と他者の相互性が生じる場を“可能性のある空間 potential space”と表現する。本論ではまず、この可能性のある空間の発生の場に赴き、原初の主体と他者との出会いを考えたい。

Winnicott によると、初め母親は乳児からの乳房の欲求にほぼ 100% 適応することで「母親の乳房は乳児の一部だという幻想をもつ機会を乳児に与える。その乳房は、いわば乳児の魔術的コントロールのもとにある。(15)」ほぼ完全に適応する母親によって、乳児はその乳房との関係において魔術的な全能感を体験する。このとき Winnicott は「観察者には、子どもは母親が実際に示しているものを知覚しているように見えるが、それが全面的な真実ではない (16)」と言う。そこで、乳児にとっての乳房の現れ方に注目してみよう。

乳房は「乳児がその愛する能力から、または欲求から何回も繰り返し創り出される。(15)」この欲求は「本能的緊張から生じ大きくなっていく欲求 (16)」である。すると乳房は、乳児が母親との関係を求めたり、乳房によって緊張を解消してもらおうとする欲求から作り出される。ここで重要なことは、乳児自身からの母親への働きかけが、乳房が発生する契機になるということである。乳児によって乳房が創り出されるという時、乳児自ら乳房との出会いを求める、主体的な動きがある。この条件のもとで母親のほぼよいタイミングでの授乳が初めて意味をもち、乳児にとっての乳房が形作られる。乳房が形作られるためには、乳児からの主体的な働きかけが必要条件となるのである。

乳房が乳児によって何回も繰り返し創り出される、というとき、乳房は母親の実際の乳房ではない。それは言うならば乳児が創り出したイメージのようなものである。一方「母親は実際の乳房を、乳児が創り出そうとするちょうどその場所に、その瞬間に据える。(15)」乳房を「ちょうどその場所に、その瞬間に据える」とき、乳児から創り出された前イメージとでもいうものは、母親の実際の乳房を契機にして形を与えられる。その結果、乳児はあくまで自らの一部である幻想としての乳房を得る。乳児が乳房を求める主体的な動きと、母親がほどよく実際の乳房でその欲求に応じるという出会いによって、乳房が生じるのである。我々は乳房の発生のこの場所に、乳児と母親の、主体と他者の、ある独特な出会いを見て取る。それは、主体と他者はそれそのものとして出会うことは決してない、ということである。少なくとも乳児と母親の最も原初的な関わりでは、両者の出会いは“乳房”という媒介項によってしか生じない。乳児と母親の出会いの接点に、乳房は位置づけられる。そして、その媒介項すら乳児と母親とで同じものではない。そこでは幻想としての乳房と実在物としての乳房という、主観的なものと客観的に知覚されるものの差が生じている。さらに言うと、主観的な対象と客観的に知覚される対象という差異が、その違いを保ったまま、乳房という一つの媒介一表象に繋ぎとめられる。この最もイコールなものが求められる原初的な場面—そうでなければ Winnicott は「乳児の欲求にほぼ 100% 適応する」とい

う表現を使わなかったであろう一でさえ、すでにある種の食い違い、言うならば出会い損ない、が生じているのである。なお、「乳房という言葉に母の営みの技術全体を含めている。最初の対象は乳房だと言った時、その乳房という単語は、実際の身体の乳房と同様、育児の技術を意味している(15)」という。乳房は乳児への母親や他者からの関わり全体を示している。そうであれば母親から乳児への関わり一つ一つに、実際の行為と主観的な幻想という形でずれ違いが起こっていると思われる。それゆえ「母親と幼児の間には相互交流はない。心理学的には、幼児は自分の一部分である乳房から乳を飲み、母親は自分の一部分である幼児に乳を与える(16)」と Winnicott は指摘するのである。

しかし同時に、いかようにしてもずれ違わざるを得ないこの出会いこそが、乳児の“こころ”の発生を促す、と Winnicott は考えている。乳房は自分の一部だという万能感的幻想は、たとえ根本的な食い違いがあっても、外的現実の乳房との出会いによって引き起こされる。そして Winnicott はこの幻想の発生が、その後の弁証法的な発展が想定されるような“こころ”の起源であると捉えた。さしあたり乳児が自分の一部分であると幻想している乳房は、その発生の仕方においては、主観的な幻想と客観的に知覚できるものという二つのものの差異が織り込まれ、この二つの差異の経験が主体に発現してくることをいわば待ち構えているのである。そうでなければ、我々は外的現実を知覚する契機すら失い、外的現実はいつまでも主体にやって来ず、他者との関わりも発生しないだろう。主体と外的現実の出会い、常に不完全でありながらも主体の欲求に形を与え、主体の“こころ”の発生を促すのである。「幼児は自分の創造能力に対応する外的現実があるのだという幻想をもつことができる。いい換えれば、母親の供給するものと幼児の考えるかもしれないものとが重なりあう(16)」という時、乳児と母親は同じもの・同一のものを共有しているのではなく、二つの異なるもの—主観的なものと客観的なもの—がズレたまま重なり合っている。ここに Winnicott は「母親と赤ん坊の間の、あるいは母親と赤ん坊を結び付ける、可能性のある空間(64)」の発生を見てとる。本論ではこの主観的に想像されるものと客観的に知覚さ

れるものの差異、内的現実と外的現実のズレに常に立ち戻り、この二つの中で生じることを検討していくこととなる。

可能性のある空間は乳児からの働きかけと、母親からのある一定の対応という往復運動によって創り出される。遊ぶことの母体となるのは、この母子の相互性である。しかし乳児と母親は、同じ役割を担う同等の関係ではない。Winnicott は母親から乳児への関わりの特異性、母親と乳児の非対称な関係を見抜き、それを“ほどよい母親”という概念で呼んだ。ほどよい母親とは「初めは幼児の欲求にほぼ完全に適応し、その後時間の経過に伴い、母親の不全 failure に対処する幼児の能力が成長するのに応じて、徐々に適応の完全さを減らしていく母親(14)」である。このような母親のもとで、初め乳児は乳房が自分の一部であるという幻想を持ち、次いで移行対象と遊び、徐々に乳房が自分の全能的コントロールの外にある客観的对象であると知覚していく。それゆえ Winnicott は「この複雑な過程は、その過程に関与し、乳児が手放したものを再び乳児にもどしてやる準備のできている、母親または母親像がいるかどうかによる(63)」と述べ、また「信頼しうること(64)」と言うことで、この過程を支える母親の役割を常に言及するのである。

なお、ほどよい母親とは一見すると乳児からの欲求を100%満たすと捉えられがちである。むしろほどよい母親とは「子どもが遊んでいる時、応答できる人 responsible person が利用可能でなければならない(67)」とか「その人は幼児の遊ぶことによって生じることを照らし返してくれる reflect back と感じられる(64)」と示されるように、乳児からの働きかけにほどよく応じるのである。

3. 移行対象—象徴と他者性の発生

乳児は生後2・3カ月になると「原初の“自分でない”所有物(6)」である移行対象を創り出し、それと遊ぶようになる。それは毛布やテディ・ベアのぬいぐるみなどである。筆者はこの原初の“自分でない”ものの発生が、主体に重要なものをもたらすと考えている。それは象徴と他者性である。移行対象と象徴、そして

他者性について見ていきたい。

乳児は、乳房が自分の一部であるという幻想をもつ。この全能的な幻想のままでは、乳房を客観的な対象として知覚することはない。これを揺るがすのが、乳房の不全 failure であると思われる。母親は乳児に対して徐々に不十分な存在となり、乳児は欲求不満を体験する。「欲求へ不完全な適応が、いわば対象が愛されるものであると同時に憎まれるものになることが、対象を現実的なものにする (14)」というように、欲求不満は、乳房が自分の一部ではないという対象の外在性を認識する契機となる。そこで乳児は「母親の不全に対処する幼児の能力 (14)」によって、その不全の乳房に関係する移行対象を創り出す。

ここで重要なのは“乳房の不全に対応する乳児の能力”である。この能力は少し複雑である。まず、乳児は乳房の不全を認めなければならない。“自分の一部である”という全能感的な幻想とは、乳房が主体と融合して、永久に実在し続けるという幻想である。乳房と一体となった主体は、常に一定の満たされた状態を保たれる。こうなると時間や空間の違いが生じない。それどころか時間や空間すら生じないとも言える。乳房が欠けているという欲求不満は、自分の一部で“ある”こととそれが“ない”ことの差異の体験となる。この差異は、時間が前後する体験であり時間性を発生させる。また同時に、乳房が自分の外にあることになり、空間性も生じさせる。この乳房の不在・欠如を認めることが“乳房が自分の一部である”幻想を否定するのである。

そしてもう一つは「対象を創り出す、考え出す、引き出す、考え起す、創る幼児の能力 (2)」である。「移行対象は乳房、または最初に関係性をもった対象を表象する (12)」というように、乳房の不在に出会うとき、乳児は自らの能力で乳房を表わす移行対象を創り出す。のちに詳しく述べるけれども、この原初の“自分でない”所有物は、物質であることによって異質性を常に主体につきつける。すると乳房が自分の一部であるという幻想が、常に否定され続ける。言うならば主体は最も親密な幻想を、永久に失う。乳房の不在を認めることと“自分でない”もので表象することという二つの契機が、乳房が自分の一部であるという幻想を否定

するのである。

移行対象が乳房を表象すると、主体は乳房を全く失ってしまうのであろうか。移行対象は単に乳房を示す記号ではなく「幼児に暖かさを与え、感動させ、感觸をもっているように見え (…)

それ自体が生命力や現実性 reality を持っている (7) 』ような対象である。それゆえ乳児はそれに「おぼれるほど夢中になる (1)」という。すると主体が永久に失うのは自分の一部であるという幻想であって、乳房それ自体の性質、つまり乳房の現実性は移行対象に保たれる。移行対象は乳房の性質を帯びつつ、それでいて“自分でない”他のものである。この対象には、乳房“であるかのような”ものという形式が常にみられる。そのものそれ自体ではないけれども、そのものの性質を帯びるもの。そのもの“であるかのような”もの。これは象徴に他ならない。乳房の不全に対応する乳児の能力、移行対象を作り出す能力とは、象徴化のことである。「乳児が移行対象、つまり最初の自分でない所有物を使用している時、私たちはそこに、子どもの最初の象徴の使用と最初の遊びの体験の両者を見ている (130)」というように、Winnicott は移行対象を最初の象徴の発生として、そして遊びの体験として捉えているのである。

さて Winnicott は、あくまで遊びは子どもから生じなければならず「遊ぶことは自発的でなければならないし、決して他人に迎動的になったり、黙従してはならない (68)」という。子ども以外の者が遊びを設定したり、計画したりすることは「この可能性のある空間が、乳児以外の誰かから投入されたもので満たされる危険 (137)」であり「他の誰かからこの空間に入ってきたものは、すべて迫害する素材であり、乳児はそれを拒否するすべがない (137)」という。乳児以外の他者が可能性のある空間に侵入してはならないならば、可能性のある空間に他者が入る余地はなくなる。それでは、どのようにして自分でないもの—他者—が主体に挿入されるのだろうか？それはもちろん、移行対象によってである。移行対象は原初の“自分でないもの”—他者—として主体に挿入される。さきほど移行対象は母親の不全から創り出されると述べたが、厳密に考えていくと事態は若干異なってくる。ほどよい母親とは「母親の不全 failure に対処する幼児の能力が成長す

るのに応じて、徐々に適応の完全さを減らしていく母親(14)であった。こうなると、母親の不全に対処する幼児の能力が先で、そのときに母親が不全に応じることによって移行対象が創り出されるのか、母親の不全が先で、その欲求不満が乳児の不全に対処する能力を刺激し、乳児が移行対象を創り出すのかが分からなくなる。ここで、ほどよい母親について Winnicott は「赤ん坊の能力で見出せる存在であることと、(逆に)母親が見出されるのを待つ存在であることの間を、母親(やその役割)が“行ったり来たり”することを意味している(63)」と述べる。つまり Winnicott は、この二つの役割の入れ替わりが、移行対象を創り出すと考えている。乳児の乳房の不在に対処し移行対象を創り出す能力と、母親のほどよい不在。二つの状態のどちらかが、そのつどそのつどで生じるような動きから、移行対象は創り出されるといえる。この往復運動の生じる場が、可能性のある空間である。子どもが自発的に一あえて繰り返せば主体的に一母親に働きかけ、また母親がそれに応じるような場である可能性のある空間の中で、主体にとっての他者性が生じるのである。

他者性とは可能性のある空間の中から生じ、決してその空間の外から押し込まれるものではない。この他者性が主体にとって新しいものとして到来する。つまりこの他者性と出会い、それに関わることで主体に新しいものが導入され、主体は変容し、“こころ”が創られていく。初めの主観的对象である乳房、初めの“自分でない”所有物である移行対象、そして遊ぶことは、主体から自発的に一そしてそれに応える他者とで一創り出される他者性が織り込まれていく過程である。このような主体の歩みは決して可能性のある空間に侵入しないけれども、主体の遊ぶことに応じる他者がいないと創り出すことはできない。するとこの他者とは、主体の遊びの場を保証し、遊ぶことに応じる他者であり、可能性ある空間を支える他者である。主体と対等なあるいは(“客観的立場”という名目で)優位性をもつ他者ではない。さらに言うと、子どもの遊びを“指導”したり“設定”したりしない。その場を先導するような他者は、有効な介入を施しているように見えて、“他者がこの行為を行ったゆえに主体が変容した”と強迫的に示したいがために、実は主体を脅かし、主体

性をかき消す。ほどよい母親として表わされる他者は、むしろ主体の遊ぶことの間を支えるような、表面的には現れることのない他者である。このことは“主体の歩みは、遊ぶ主体に応じる他者がいないと創り出せない”という言い方にも表れている。“A ゆえに B が生じた”という単純な肯定ではなく、この“A でなければ B は生じなかった”という二重否定を含んだあり方が、主体が真に他者性を含んでいくために必要な、他者の態度であると考ええる。

4. 二重の現実性—外的現実の物質性と不確定性によるゆらぎ

Winnicott は「移行対象に関して、幼児は(魔術的な)全能的コントロール omnipotent control から巧みに操作するコントロールへと進んでいく(12)」と述べ、主体が移行対象と関わることで幻想が徐々に幻滅していくとしている。移行対象と関わることで、乳房という媒介に潜在的に織り込まれていた主観性と客観性のずれが、初めて現れてくるのである。Winnicott は移行対象と関わることで遊ぶことを、同じ論理で捉えている。ここで、移行対象や遊ぶことが、内的現実と外的現実との関係において逆説的に記述されることから始め、次に全能的なコントロールから現実的なコントロールへ、主観的对象から客観的に知覚される対象へ移行する過程について、考えていきたい。

移行対象は「外的対象(母親の乳房)とも内的対象(魔術的に取り入れられた乳房)とも関連をもっているが、そのどちらからも明確に区別される(19)」という。まず、内的現実と関連して移行対象は「それ自体が生命力や現実性を持っている(7)」のであった。乳房を表象する移行対象は主体を惹きつけ、主体に生き生きとした現実性を感じさせる。それは内的現実のリアリティリアリティを帯びるのである。一方、外的現実と関連して移行対象は原初の“自分でない”所有物である。そこには自分でないもの、他者性が含まれている。同様に遊ぶことの素材も、子どもは外的現実から集めた対象を内的な現実から派生するサンプルとして使い、「子どもは、幻覚を生じずに夢となる可能性の一つのサンプルを差し出し、そのサンプルとともに生きる(69)」

という。その素材は子どもを惹きつけ、それで遊ぶことで子どもは内的な現実性に深く入っていく。しかし注意しておきたいのは、我々は内的な現実性に真に入ると幻覚を体験してしまうことである。幻覚では、主体が内的な現実性に完全に入ってしまう、内的な現実がそのまま外的な現実となる。とすると、遊ぶことでの内的現実性に深く入るといっても、幻覚を体験するような在り方であってはならない。

ここで重要なのは、子どもが遊ぶサンプルは必ず外的現実の素材、つまり“自分でない”ものであることである。「毛布であることのポイントは、その象徴的価値よりもその実在性にある。毛布は乳房（や母親）ではなく、現実であるが、それは毛布が乳房（や母親）を象徴している事実と同じくらいに重要である（8）」と Winnicott は“自分でない”ものの特性を何よりもその実在性、つまり物質性に見ている。乳房を表わす握りこぶし・毛布・ぬいぐるみは、一つの物質マテリアルそのものである。物質性は主体に対して、まず何よりもその異質性を主張する。その形・材質・手ざわりは決して乳房ではない。いくら毛布を舐めまわしても主体はそこからミルクを得られないし、ぬいぐるみは自分をあやす言葉を語りかけてはくれない。それに加えて、大きさ・形・材質によって、むしろ物質の方がその使用方法を主体に指定する。例えばブロックで城を作るとき、ちょうどよい大きさと形のブロックを選び、下から順番にバランスよく置かなければならない。物質はその特徴によって主体に時間的・空間的な制限を加えるのである。そして当たり前であるけれども、物質は常に実在し続ける。この常にその物質であり続けるという恒常性のために、その素材は主体にとって常に異質であり、常に時間的・空間的に制限するのである。それゆえこの物質性が、欲求のとおりになる全能的なコントロールを常に否定していく。言うならば、主体はその物質性に常に引っ掛かり、内的現実性に完全に浸りることがない。あるいは外的な物質性は、内的現実性に完全に入ろうとする主体を常に弾き出してしまう。これが Winnicott の言う「主体の全能的コントロールの領域外（120）」であり、外的現実リアリティの現実性である。つまり遊ぶことでは、そのサンプルは内的現実性に由来しながら、その物質性ゆえに外的な現実性を孕み、

幻覚や全能的コントロールが生じる次元での内的現実を常に否定していく。それゆえ“幻覚を生じずに夢となる可能性”と言うように、遊ぶことはむしろ夢を見ることに近くなる。ということは、主体が遊ぶこととは、主体には異質で時間的・空間的な制限を強いる物質としての現実性を孕むと同時に、主体を惹きつける内的な現実性をも帯びる対象と関わることである。遊ぶことリアリティに生じているのは、この相反する二重の現実性をもつ対象との関わりである。

さらに、この二重の現実性と関わることで、物質性が主体に時間的・空間的な制限を加える一つの偏った現れとして、もう一つの契機がそとと潜むような形に入り込む。立木（2007）は、質料（物質）のうちには必然と同時に偶然の可能性が常に宿っているという。子どもが使う玩具にはその物質性ゆえに、内的な空想の通りに遊びが展開せずに思わぬことが生じる可能性が忍び込んでいる。具体的な例で考えてみると、ジェンガでは、積み上げられるにつれて積木がますます揺れていく。キャッチボールでは、ボールは思わぬ方向に飛び、セラピストの顔に当たるかもしれない。子どもが実際に遊び出すと、遊ぶことの場に予測不能の不確定性・偶然性が常に一その行為の目的に揺さぶりをかけるように一潜んでいるのである。Winnicott はそれを全能的コントロールのもう一つの“外”，不確かさであると指摘する。「遊ぶことについては常に、その個人にとっての心的現実と、実在する対象をコントロールする体験との相互作用の不確かさがある（64）」という。遊ぶことは、実在の対象に潜んでいる不確定性・偶然性を常に頭に入れたコントロールを強いられ、あるいは実際に偶然の出来事が生じ、心的現実の全能的コントロールが剥がれていく。それゆえ Winnicott は続けて「それは魔術自体の不確かさである（64）」と指摘することを怠らない。ジェンガの積木が揺らぐのに応じて、全能的な心的現実もまさに揺らぐ。積木がこの先どうなるか分からないという体験は、全能的コントロールではなく、不確定な一そして豊かな一外的現実の時間性・空間性の体験である。「全ての赤ん坊は、彼あるいは彼女にとって都合のよい体験も都合の悪い体験もする（135）」というように、遊びはうまく行ったり行かなかったりする。つまり、時間的・空間

間的な場（我々はそれを可能性のある空間と呼んだ）に遊びが位置づけられることで、主体は内的現実と外的現実の間の不確定な揺らぎを体験する。したがって遊ぶこととは、内的現実と外的現実の間の不確定な揺らぎの運動であり、この運動の中で対象への全能的コントロールが徐々に削がれ、対象を実在物として操作していくようになる、弁証法的な動きであると言える。

なお、遊ぶことで主体が次第に身に付けていく外的現実には、ある程度の限度がある。例えば子どもがぬいぐるみで十分に遊んだからといって、直ちに“完成された”外的現実を知覚しはしないことは容易に理解できよう。「客観性というはある程度、相対的な言葉である。なぜなら、定義によれば、客観的に知覚されるものは、ある程度主観的に想像されたものである(88)」という。遊ぶことで身に付けられていく客観的な知覚は、その遊び、その素材の外的現実性の範囲内であるといえよう。それゆえ Winnicott は、遊びと外的現実の弁証法について「現実受容という作業は決して完結しないし、内的現実と外的現実を関連させる重荷から解放される人間はいない(18)」と指摘するのである。

5. 主体のコミットの場

Winnicott は遊ぶことの弁証法的な動きを端的にこう表現する。「外側のものをコントロールするには、物事を行うことが必要で、単に考えたり欲したりすることではない。(…)遊ぶことは行うことである。(55)」この行うこととは、単に遊ぶということではない。そこへ主体を真にコミットさせる必要があることを意味する。Winnicott は遊ぶことは無限に感動的であり、この感動的な面を引き起こすのは不確かさであるという(70)。また「主観的对象と客観的に知覚される対象との間の可能性のある空間において最大限の強烈な体験をする(135)」というのも、主観的对象と客観的に知覚することの相互作用は不確かさであるゆえに、同じことを示している。遊ぶことの不確かさの体験とはどのようなものであろうか。

不確かさは、遊ぶことの素材の物質性ゆえに生じる

のであった。遊びの場は“この先どうなるか分からない”予測不能な場になる。すると“この先が分からない”ために、遊ぶことの時間性が“今”に限定される。それに加えて空間的には、遊ぶ主体は目前の“この素材”にのみ関わることを強いられる。主体は空間的に“ここ”という場所を生きる。つまり遊ぶことの不確定性・偶然性によって時間と空間が限定され、主体にとって“今・ここ”だけ、唯一1回だけの体験となるのである。なお、この素材は我々から見ると主観的对象と関係しており、実のところ新しい対象ではない。Winnicott も「観察者として(…)遊びの中のすべては、以前に行われ、以前に感じられ、以前に嗅がれたものであり(…)移行対象もまさに選り出されたもので、創造されたものではない(136)」と述べる。遊ぶことを外から見ると、それは乳房の象徴であるとか、ある症状の代わりであるとか、以前のを繰り返しているにすぎないとか見做してしまう。それは遊戯療法に対して“遊んでいるだけで治療となるのか”と、しばしば素朴な（そしてかなりの外れな）意見を述べることに同じである。この態度は遊ぶことの体験を外から見て、そこで生じていることを考えられていない。

もう一度、遊ぶことの中で生じることに目を向けてみよう。遊びの素材は内的現実から派生し、主体を惹きつける生き生きとした対象となる。そして主体の側も自発的にその素材と関わっていく。遊ぶことには主体からのコミットが生じるのである。すると遊ぶことにおいて主体は、その素材に惹きつけられ入っていくと同時に、素材の不確かさによって“この先どのようになるか分からず”、都合のよい体験も都合の悪い体験もするような、内的現実と外的現実の揺らぎの運動の中に入る。この素材との戯れで生じる不確定な揺らぎが“今・ここだけの、1回だけの”体験となる。すると遊ぶことはまったく新しいものとの生き生きとした出会いの体験となり、主体に強いインパクトを与えるであろう。この主体の状態を Winnicott は「夢中(69)」、「集中と同じ、ひきこもりに近い状態(69)」と指摘する。こうして主体は遊ぶことの場に真にコミットしていく。逆に言うと、他者から遊びを設定したり予め遊びの結末が分かっていると、遊ぶことの不確かさも、対象との生き生きとした

出合いも、主体が真にコミットすることも生じない。以上のことを Winnicott は的確に「そこには予め定められたゲームはなく、そのためすべてのことが創造的である。そして遊ぶことは対象と関係することの一部であるにもかかわらず、そこで生じるすべては乳児に本質的な影響を与える personal。すべての物質的なものが想像によって入念に仕上げられ、いつでも初めてであるような質を帯びる。これが“備給”という語が持つ意味ではないだろうか？ (136)」というのである。

6. 遊ぶことの創造性—主体の消失と非人称的な場

Winnicott は遊ぶことが創造的であると繰り返し述べる。遊ぶことは子どもにとって全く新しいもの、他者性との出合いの場であった。またそれは不確かさによる、対象の全能的なコントロールから客観的な操作への弁証法的な動きであった。しかし我々が弁証法的というとき、遊ぶことの中から突如新しいものが出現しうる、ということも意味する。ここで、Winnicott のダイアナの事例 (59-62) を簡潔に紹介したい。

事例：ダイアナは5歳の健康で、知的な女の子である。診察を受けたのはダイアナではなく、抑うつ的な母親である。精神的に欠陥があり、先天的な心臓疾患をもつ弟について母親は相談しに来た。初めからダイアナに主導権があった。Winnicott がドアを開けたところ、ダイアナが姿を見せテディを自分の前に突き出していた。Winnicott は母親と女の子は見ずに、まっすぐテディに向かって「名前は何て言うの？」と言い、女の子は「テディよ」と言った。ここですぐに Winnicott とダイアナに強い関係が生じた。母親が相談している間、ダイアナは一人でテディと遊びながらそれを聞いて「心臓に穴が開いているの」と言う。そして Winnicott はテディに耳をつけ「一緒に遊んでくれる誰かを欲しがっていると思うな」と言って、部屋の隅にいる子ヒツジを持ってくるように言う。彼女は子ヒツジを持ってきた。彼女はその二つを服の中に入れ、妊娠する。少しして彼らは生まれそうだと言い、「双子にはならないの」と言う。まず子ヒツジを、次

にテディをと順番をはっきりつけて、生んでゆく。そして二人の子どもをベッドに寝かしつける。一緒にすると喧嘩になるからと、それぞれをベッドの両端に置き、二人を静かに眠らせる。ダイアナの遊びは続いていく…。

母親が動揺して泣き出したとき、ダイアナは一瞬不安そうに見上げた。Winnicott は「お母さんは病気の弟のことを心配して泣いているんだよ」というとダイアナは安心して遊びに戻る。そして後になって、母親の方が弟のことで動揺し、Winnicott と会うことが不安でダイアナを連れてきたのだと分かった。ダイアナは精神療法医へ会うことが分かっていたかのように、家を出る前にテディや他の移行対象を集めていたという。

まず、ダイアナとテディに対する Winnicott の態度について述べておいてもよいだろう。Winnicott がまず関わったのは、母親でもダイアナでもなく、移行対象のテディである。不安な母親は、自らの抛りどころとしてダイアナを治療に連れてきた。遊んでいる時に母親の相談を聞いていて、さりげなく情報を補足することにも、それは表れている。するとダイアナはテディを抛りどころにするしかない。この治療の場で二人を支えているのは、この移行対象である。それゆえダイアナは一番初めにテディを Winnicott に差し出し、来談したものの中で最も支えとなっているものを示すのである。言うならば、テディが Winnicott の治療を受けにきている。Winnicott は母親でもダイアナでもなく、テディに向かって「名前は何て言うの？」と語りかけることで、ダイアナの初めの問いに見事に応える。「移行対象は私たちと乳児の間の同意事項である。だから、私たちは決して、次のような質問はしない。『それはおまえが想像したものなの、それとも、外からおまえに差し出されたものなの』 (17)」というように、テディを外から捉えることはしない。むしろテディと同じ次元—移行対象の次元—で関わった。そして Winnicott がテディの意見を一旦聞いた後に、子ヒツジを指し示すと、ダイアナはこの子ヒツジとも遊ぶようになる。Winnicott とダイアナの間に可能性のある空間が成立しているのである。

この可能性のある空間の中で、ダイアナは二人の子どもを双子ではなく順番に、まさに姉と弟として生みだす。そして二人の子どもの世話をする遊びが展開する。ダイアナは子どもの世話をするお母さんを演じることに夢中になる。母親は子どもの世話について相談に来ていた。ダイアナは不安な母親を支えなければならず、母親との関係においてダイアナも不安であった。その中でダイアナの遊びに、まさに子どもの世話というテーマが生じたのである。そこでは丁寧に世話をする母親と安心して眠る二人の子どもが現れる。「この遊びは自己を癒す性質の遊びである (62)」というように、移行対象が世話をされ安心する遊びは、ダイアナの不安を減じる。この遊びは「弟の世話をする責任感があるという点でも、母親に同一化できること (62)」をも示し、ダイアナに弟の世話をする可能性が生じたことを示唆している。言うまでもなくこれらは母親を助け「遊ぶことそれ自体が治療 (67)」となることを示している。

ここで、ダイアナは不安を軽減するためにこの遊びを行った、と捉えてはならない。むしろこの遊びが生じたことで初めて、ダイアナは癒されたのである。このように遊ぶことでは一外から迫害的に挿入されるという形ではなく一可能性のある空間の中から、新しい遊びが創造されることがある。このとき主体は夢中になり、いわば忘我の状態遊ぶことにコミットする。意識的な自我が忘れられ、主体が遊ぶことに委ね、主体を遊ぶことに譲る。すると、先ほど引用した言葉をもう一步押し進めることが出来る。遊ぶことでは「幻覚を生じずに夢となる可能性の一つのサンプルを差し出し、そのサンプルとともに生きる (69)」のであった。忘我の状態は夢の状態に近づく。夢では、主体は夢に委ね、自我のコントロールを超えた新たなものとの出会いが生じる。Winnicottはこのことに十分気付いて「重要な契機は、子どもが自分自身と予期せずに出会うsurprises ことである (68)」と述べるのである。そして“そのサンプルとともに生きる”というように、遊ぶことでは主体が真にその場にコミットし、自我のコントロールを超えた新たなものとの出会いを生きるのである。遊ぶことは「空想自身が自律的、非人称的に展開し、新たなものを生み出している (村上, 2010)。」

ダイアナが主体ではなく、むしろダイアナという主体が消える非人称的な場が生じ、遊ぶことが主体となるのである。

ここまで考察することによって、「遊びこそが普遍的である (56)」という言葉をも具体的に捉えることが出来る。遊ぶことが第一であり、遊ぶことが現実に先行し、遊ぶことが現実を創り出すのである。村上 (2010) も同様に「実生活ですでに実現していた成長を遊びの中で反復しているというよりも、遊びにおいて演じうる・変容しうるということそのものが成長なのである。遊びにおいて演じられないような行為を現実化することはできない」と指摘する。そして遊ぶことを第一のものとして捉えることで、可能性のある空間こそが乳児の心の発達から精神病理、文化・芸術的な活動へ至る人間の“こころ”の様々なあり方を表わす場であると考えられる。Winnicottはそれを繰り返し強調し、例えば「移行現象から遊ぶことへ、遊ぶことから他者へと共有する遊ぶことへ、また、そこから文化的体験へとまっすぐに発展していく (69)」と述べるのである。

7. 最後に一言について

最後に、移行対象に名前を付けることを取り上げ、遊ぶことと言葉について考えてみたい。乳児は移行対象である毛布に例えば“baa”という名前を付けることがある。Winnicottは「幼児がこの最初の対象に付ける名前は、多くの場合重要な意味を持っている。つまり、その名前には通常、大人が使った単語が部分的に混入している。たとえば、“baa”というのが名前である場合、その“b”は大人が使った“baby”“bear”という単語に由来しているかもしれない (6)」と指摘する。ここでいう大人とは、母親、あるいは母親の役割を担う他者であろう。乳児は乳房を表す移行対象に、母親が発した“b”をあてがう。移行対象を名指すことにおいても、もはや“自分ではない”ものとなってしまった、最も親密な対象・最も融合していた対象・最も離れたい対象を呼び起こすような記号を、乳児は選ぶのである。“baa”もまた移行対象と同様に、乳児と母親の初めの関係性としての乳房を意味し、内的

リアリティ
現実の現実性を帯びる。

しかし一方で、移行対象が乳房そのものではないのと同様に、“b”は母親ではない。言うならばそれは母親の痕跡である。そして“baa”という言葉は、初めの象徴である移行対象自体を象徴する。このとき、移行対象や遊びの素材が外的現実の物質性を持ち、それによって外的現実の制約を主体に課すのと同様に、言葉の次元においても、いわば言葉の記号性が主体に制約を課す。その一つは、“baa”と言う限りにおいて、毛布はどこにも実在しない。つまり“baa”という言葉はあくまで一連の音の連なり、記号であり、何よりも移行対象の実在性を否定する。もう一つは、“baa”は「組織化された音(6)」となり、babyがb-a-b-yでなければならないのと同様、b-a-aというスペルが固定される。これが発展すると、文法によって語順などが決められていくのである。つまり言葉もまたその用法を主体に強制し、主体は空間的・時間的な制約を受ける。以上から“baa”という言葉もまた、遊ぶことの中で内的な現実性と外的な現実性の二重の現実性を持つものとして使用されるのである。

そして重要なことは、“b”が主体に挿入されるこのとき、主体はまさに象徴の世界—言葉の世界—に参入するのである。“b”という言葉は母親の痕跡であると同時に、記号という一つの他者として主体に挿入される。その記号は移行対象の実在性を否定し、主体にその用法を強制するのであった。ここで興味深いのは、実体を消し、その用法で主体を制約するこの言葉こそ、主体と他者とのコミュニケーションを可能にすることである。言葉が一つの“他者”であると言うとき、言葉は最も親密なものから主体を遠ざける“自分でないもの”—他者—として働くと同時に、主体が“自分でないもの”の場—他者の場—へ開かれる媒介として働くことをも意味するのである。乳児が最初の象徴である移行対象を創り出すのは、乳房の不在によって乳房を求めるからであった。この時Winnicottは「可能性のある空間において、外的世界の現象と個人の人間の現象を、一挙にそして同時に表象する象徴の使用が発達する(146)」と、可能性のある空間を象徴が発生する場としても位置付ける。我々はWinnicottによって、この母親motherへの呼びかけが、同時に他者otherへ

開かれることになるその現場へ導かれたのである。

*注 Playing and Realityからの引用頁は本文中に()内に記した。

文献

- 村上靖彦(2010) 創造性と知覚的空想：フッサールとウィニコットを巡って 大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 36. 99-116.
- 立木康介(2007) 精神分析と現実界 フロイト/ラカンの根本問題. 人文書院.
- Winnicott, D.W. (1971). *Playing and Reality*. London and New York :Routledge.